日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館
令和６年 第１回 特集展

学芸員のまなざし

2024 2/6(火) – 2024 6/16(日)

主催　日出町歴史資料館・帆足萬里記念館
日出町教育委員会社会教育課

Ⅰ 神儒仏の日出藩主墓考

日出藩主墓所の考古学

江戸時代、日出藩３万石（後に２万５千石）を統治した豊臣一族木下家は、国元では「康徳山松屋寺」（曹洞宗）、江戸では「萬松山泉岳寺」（曹洞宗）に一族の墓所が営まれました。また、国元では松屋寺とは別地に３代藩主俊長の墓所「横津御廟」が独立して営まれました。松屋寺の藩主墓所（以下、「松屋寺墓所」と称す）は一族の菩提寺にふさわしく「仏式」に則り、横津御廟は俊長の遺命を受けて「儒式」に則り、それぞれに墓所が造営されました。

本章では考古学のまなざしで、国元に営まれた２つの日出藩主墓所の営みをひも解きます。そして、これまで「政治的関係」に捉えられてきた木下家・日出藩主家一族の系図や系譜を「宗教的側面」、特に３俊長とその墓所「横津御廟」に特徴づけられる「儒教」（神道）受容の観点で読み解きます。

日出藩木下家

日出藩祖木下延俊は天正５（1577）年、木下家定の三男に生まれました。家定の妹おね（高台院）は豊臣秀吉の正室で、延俊は甥にあたります。文禄3(1594)年、延俊は細川忠興の妹加賀を正室に迎え、忠興との姻戚・親交は後の木下家存続の支えとなりました。

延俊の父家定はもともと平姓杉原氏を名乗っていましたが、秀吉に仕え、また、妹おねが秀吉の正室ということもあり、豊臣姓木下氏の名乗りを許されました。延俊も秀吉に仕え、天正 16（1588）年に摂津国駒ヶ林 500 石、文禄４（1596）年には播磨国内２万５千石を封与されました。家定が播磨国姫路２万５千石を封与され、大坂城留守居の折には延俊が姫路城の城代を務めました。

慶長５（1600）年の関ヶ原の戦において豊臣一族であった延俊は、忠興の進言により徳川勢に加勢しました。関ヶ原に出陣せず姫路城にて西国の兵に備え、戦後、石田勢残党の小野木縫殿助（重勝）が籠城する丹波福知山城を忠興とともに攻め落としました。その後、忠興の論功行賞の上聞を経て翌慶長６（1601）年、延俊は忠興の領地であった豊後国速見郡内３万石の割譲・封与により、日出藩を立藩しました。

慶長６年８月、日出に入封を果たした延俊は日出城の築城をはじめ、日出藩の体制確立に向けて諸政に意を尽くし、寛永 19（1642）年１月７日に逝去しました。日出藩木下家はその後、２代俊治の弟延由への５千石分知(立石領)により２万５千石の所領となりましたが、転封や改易を受けることなく 16 代 270 年におよび存続しました。

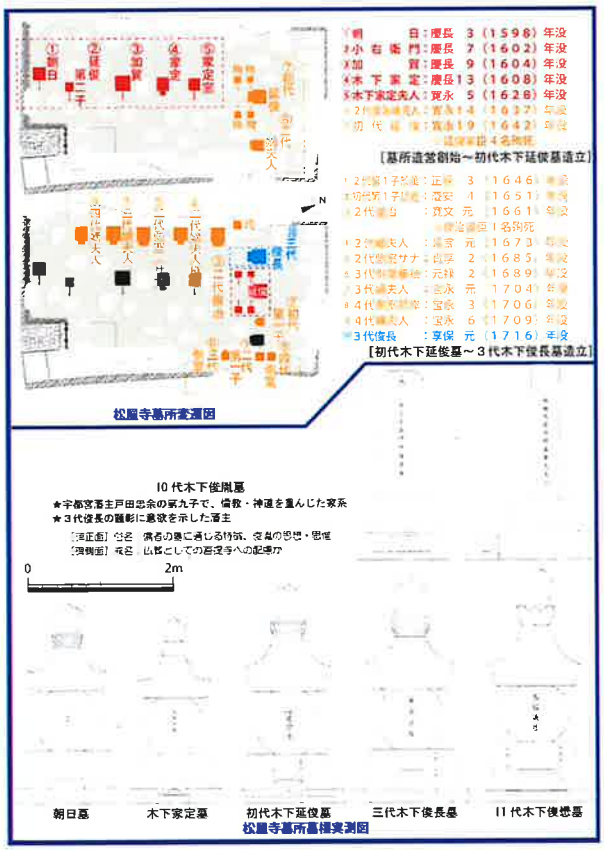
松屋寺墓所－仏式墓所－

康徳山松屋寺は慶長 12（1607）年、おね（高台院）の母朝日（慶長３年没）と初代延俊の正室加賀（慶長９年逝没）の菩提を弔うため、延俊が開基を命じ建立されました。寺名は朝日の「康徳寺殿松屋妙貞大姉」、加賀の「松屋寺殿即庵貞心大姉」の戒名に因みます。

墓所は本堂の西隣に位置し、寛永年間の創始と伝えられています。五輪塔を主体とする木下家一族の墓群が林立（乱立？）して営まれていますが、没年順に墓所の変遷や墓標の変化を考察すると、木下家一族の系譜や先祖祭祀の一面が様々に浮かび上がってきます。

例えば墓所には、朝日の墓（供養塔）が造立されています。日出藩木下家にとって朝日は、豊臣一族由緒の正統を示す特別な存在であったようです。朝日と延俊、木下家一族、日出藩主家との結びつきは、日本史上の重要な歴史テーマの一つといっても過言ではありません。

また、墓所造営は寛永年間のはじめ、朝日を筆頭に小右衛門（延俊第２子）、加賀、そして家定夫妻と、延俊近親の一族の墓（供養塔）の造立に始まりました。この墓列を中心にその傍らに造墓が展開していきますが、寛永 19（1642）年の初代延俊没後の造墓は延俊墓が中心に代わります。「主君を前にその傍らに家臣が座す」といった造墓の規則性を読み取ることができますが、享保元（1716）年没の名君 3 代俊長墓（供養塔）は、あたかも藩祖延俊に肩を並べるように造立されています。こうした墓所の営みを通じ、藩主家一族の先祖への畏敬やその移り行きを読み解くことができます。



日出藩３代藩主木下俊長

慶安 2（1649）年 1 月 13 日、2 代俊治の第三子として日出城に生まれ、母の側室サナ（照高院）は三州田原出身で安藤氏の娘とされています。父俊治の正室は深溝松平家 5 代忠利の娘で（6 代忠房と兄妹）、継室は大老酒井忠世の実弟西尾忠永の娘です。寛文元（1661）年、俊治の急逝により家督を継ぎ、従五位下の叙任を受けました。寛文 5（1665）年、土浦藩主朽木稙綱の娘を正室に迎え、宝永 4（1707）年に俊量へ家督を譲り、享保元（1716）年 9 月 8 日に逝去しました。文武の奨励、社寺の整備（奉納寄進）、灌漑整備（溜池築造）、殖産振興（七嶋藺栽培）に努め、藩主一族や家臣、領民に名君と称えられました（大正 5 年 12 月 28 日従四位追贈）。

俊長は幕府儒官の人見竹洞（1637 ～ 1696）に師事・親交し、日出町には竹洞とその子桃原（又兵衛）の詩文が伝えられています。例えば、竹洞は日出藩御茶屋襟江亭の眺望を詠んだ八景詩や元禄 8（1695）年に俊長が鋳造を命じた時鐘の鐘銘、桃原は宝永 2（1705）年に俊長が逵ノ堂愛宕社に建立を命じた瞽者放明碑の碑文が挙げられます。人見家の墓所が営まれた曹洞宗雲龍寺（栃木県足利市）には、俊長画の「竹洞肖像」が伝存します。

また、俊長は御用絵師（奥絵師）で木挽町狩野家 2 代の狩野常信（1636 ～ 1713）にも師事・親交し、日出町には常信の画が伝存するほか、松屋寺は元信や探幽、洞雲（益信）の画軸を旧蔵、俊長が横津に築いた御茶屋「海日観」にも常信画の屏風や襖が設えられていました。

横津御廟－儒式墓所－

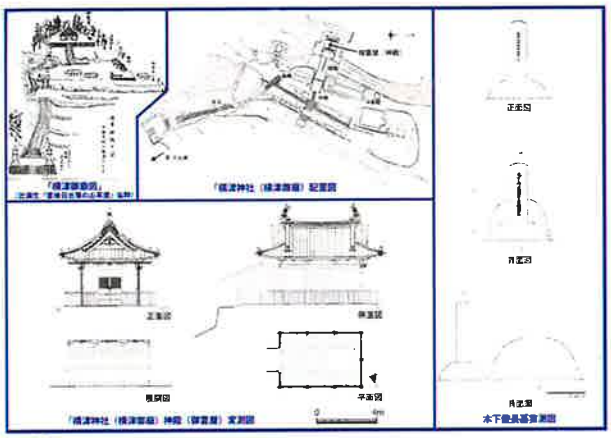
横津御廟は享保元（1716）年 9 月 8 日に没した 3 代木下俊長が、自らの遺命で「儒礼」により造営された墓所です。日出城の真北の鹿鳴越連山の中腹に営まれ、明治時代を迎えて横津神社として鎮座し今日に至ります。

俊長の葬地は、神社の神殿にあたります。神殿の建物が御霊屋（寿蔵）で、その建築構造は木造瓦葺入母屋造妻入平屋建の欅造で、四周に石造の玉垣が廻らされています。

御霊屋（寿蔵）の内部には、安山岩質の亀腹状の基台に頂部を円首に仕上げた砂岩質の石碑を据えた墓碑が築かれ、碑正面には人見又兵衛（桃源、人見竹洞の子）筆の「木下内蔵頭豊臣俊長墓」の銘が刻まれています。また、石碑の背後には表面を漆喰で塗り固めた円形の墳丘（馬鬣封）が築かれるなど、儒式墓の特徴をよく示しています。儒教（神道）の受容に努めた俊長はその最期まで、遺命にもみえる『家礼』（南宋の儒学者「朱熹」の著作で、冠婚葬祭の儀礼マニュアル）などに基づき、儒教儀礼による葬送を実践しようとしていたことがうかがえます。

なお、俊長は生前の隠居時、この地に御茶屋「海日観」を築くなど、横津の地を重用していたようです。また、儒教の経書の一つ『礼記』「檀弓下」の一節に「北

方は死者がおもむく幽暗の世にあたり、遺体は家の北方の地に頭を北にして埋葬するのが、夏・殷・周三代を通じての習わし」とあります。横津御廟は日出藩主が居した日出城の真北に位置し、儒教的思想の下にこの地が選ばれた可能性が示唆されます。



儒教（神道）受容の系譜

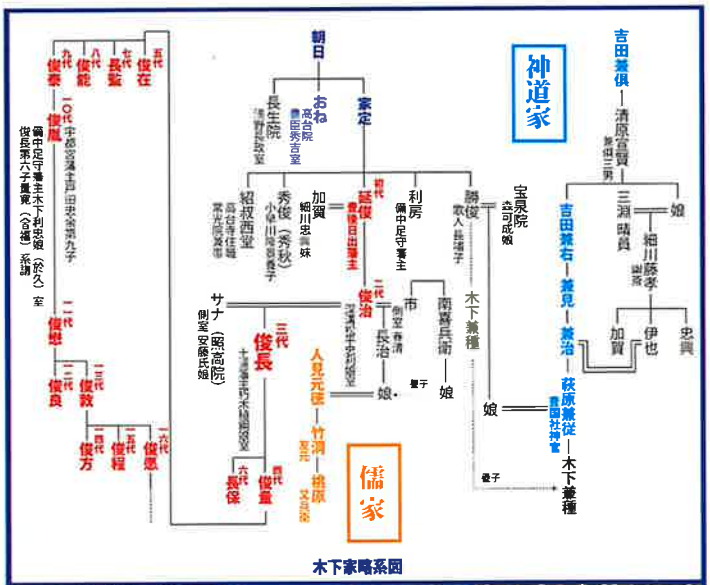
3 代俊長の儒教（神道）受容を基軸に、木下家一族の婚姻・姻戚・交友関係を探ると、その有縁の人々の中に名だたる儒家や神道家、また、仏式とは一線を画した墓所を営む数々の人物に結ばれます。

一例としてまず、俊長の竹洞への師事・親交に象徴される人見家です。竹洞は林羅山・鵞峰に師事し、幕府の儒官として大成し（子の桃原も同様）、父玄徳（元徳）も 4 代将軍徳川家綱の侍医を務める大医でした。二人の関係の礎には両家の婚姻・姻戚関係があり、雲龍寺に営まれる人見家の墓所は儒式にて造立されています。

次に、俊長の常信への師事・親交に象徴される狩野家です。木下家との直接的な婚姻・姻戚はないものの、初代延俊の時世より狩野派絵師とは接点があり、細川家を介した狩野派絵師との交流が素地の一つをなした可能性が示唆されます。日蓮宗池上本門寺（東京都大田区）に営まれる常信の墓は、碑身が圭首の亀趺碑により造立されています。

最後に、初代延俊の兄で歌人「長嘯子」こと木下勝俊（1569 ～ 1649）です。勝俊は藤原惺窩や林羅山などの儒者や文化人と親交し、子の兼種は神道家の萩原家と、その萩原家は細川家と婚姻・姻戚関係にあり、細川家は神道に通じる系譜にありました。高台寺（京都府東山区）に営まれる勝俊の墓は、碑身が圭首の亀趺碑により造立されています。

俊長の儒教（神道）受容は木下家一族にみる系譜の下、主には参勤交代で滞在した江戸を舞台に、諸大名や文化人、儒家、神道家らとの蜜な交流の中で、その思想・思惟が育まれていったものとみられます。



人見竹洞墓（雲龍寺）
狩野常信墓（池上本門寺）
木下勝俊墓（高台寺）

横津神社（横津御廟）社殿
横津神社神殿（御霊屋）
横津神社（横津御廟）神殿（御霊屋）内部
墓碑（正面）
墓碑（背面）
日出藩 3 代藩主木下俊長墓
墳土（馬蹄封）
越後塚

II 帆足萬里の最期

萬里の最期

嘉永５（１８５２）年６月１４日午の下刻（午後１時頃）、日出を代表する先哲である帆足萬里がこの世を去りました。

萬里の門弟の一人である賀来飛霞 (1816 ～ 1894) が遺した資料群には帆足萬里の最期に関わるものがあります。幼い頃に実父を失った飛霞にとって、５歳の頃から弟子入りしていた萬里は父に等しい存在であり、その死は飛霞にとって肉親を失うほどの悲しみであったと思われます。そのためか、師の死去に関する書簡を大切に保管してきたものと思われます。

また、飛霞が遺した資料には萬里の養子である民次郎が飛霞に宛てて出した葬儀参列の礼状や兄の佐之（佐一郎）が萬里の逝去について述べた手紙も残っています。

日出での萬里門下の塾頭格であった伊藤祐之も自身の日記の中で、萬里の臨終に至るまでの経緯や雷雨の中で行われた龍泉寺での葬儀、松屋寺山の墓所への埋葬の様子を記録しています。この記録によって、萬里から破門を受けていた毛利空桑 (1797 ～ 1884) が葬儀に参列できず、雨の中山上から涙ながらに萬里の柩が墓地に運ばれるのを見送った、という逸話の信ぴょう性が高まったと言えます。

このコーナーでは賀来飛霞関係資料や伊藤祐之の日記の記述を追っていく中で、今まで漠然とした形でしか語られなかった萬里の晩年とその葬儀の様子にせまりたいと思います。

賀来飛霞肖像（個人蔵）

医学啓蒙［嘉永3(１８５０)年刊行　当館蔵］

帆足萬里 73 歳の時に刊行された医学書。この著書において萬里は漢方医学と西洋医学の長所・短所を挙げた上で、日本人の体に配慮した和洋折衷の医学を提唱しています。

『医学啓蒙』の「発題（前書き）」において、本来儒学者であったはずの萬里が医学を学び始めるに至ったいきさつについて書かれています。「発題」の冒頭には「余（萬里）三十六七の時、太庵老人（賀来有軒）、賀来生（佐之、佐一郎）をして余に従学せしめ、幾程もなく老人病没して…」とあり、「息子の佐之を医者として育ててほしい」という友人の願いに応えるべく、蘭書を読んで西洋医学を学び始めたと萬里は回想しています。そして、佐之に続いて弟の飛霞も 5 歳の時から萬里に師事することになります。

『西崦先生餘稿』乾［嘉永７(安政元,1854)年　当館蔵］

帆足萬里の門弟である石川總弘によって編纂された帆足萬里の詩文集。冒頭には嘉永６（1853）年３月の日付で書かれた日出藩第 15 代藩主木下俊程の序文が掲載されています。

本詩文集には萬里が療養中に作成した「病中作」二首に続いて、「謝訪病諸君（病を訪う諸君に謝す）」と題した詩が掲載されています。萬里は、先の二首では病と向き合う自身の心境やお世話になった人々への思いについてうたっています。

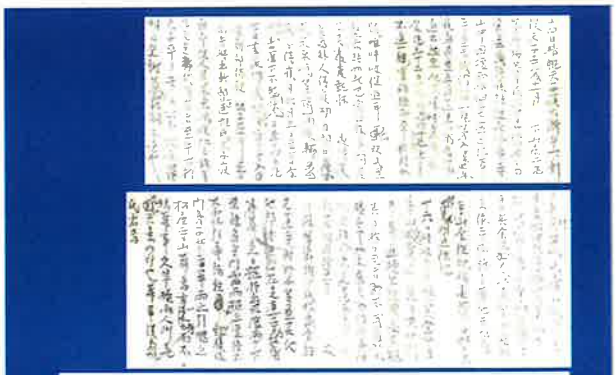
それに対して、この詩では病を軽く見て養生を怠ったことに自戒する気持ちをうたう一方で、親しい人たちがお土産をもって訪ねて来てくれたことに対する感謝の気持ちを表現しています。

伊藤祐之（松太郎）日記抜書
［江戸時代後期　個人蔵　※史料画像は佐藤暁（編）『大分県日出藩史料』第14巻より転載］

帆足萬里の門弟伊藤祐之（松太郎）の日記を抜き書きしたもの。佐藤暁氏が編纂した『大分県日出藩史料』第14巻にて紹介された史料です。

この史料によれば、病を得た萬里は嘉永 4(1851)年 11 月に目刈村（現日出町大字南畑目刈）の西崦精舎から日出城二の丸にあった養子の民次郎の屋敷に移りました。そこで療養に努めましたが、翌年の夏に入ると悪化の一途をたどり、6 月 14 日の午下刻（午後 1 時頃）に死去したと記されています。

祐之は、葬儀が龍泉寺で行われたこと、萬里の棺がそこから墓所と定めた「松屋寺山」に運ばれたこと、当日は雷雨であったことなどを書き残しており、その内容は萬里の葬列を雨中見送ったという毛利空桑の逸話と合致するものです。

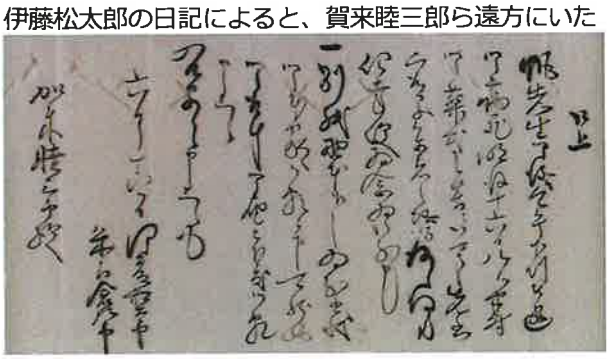


伊藤祐之日記抜書　嘉永 5(1852) 年 6 月 14 ～ 16 日条
◎佐藤暁（編）『大分県日出藩史料』14 より

伊藤松太郎・米良倉次郎書簡
［嘉永5(１８５２)年　個人蔵］

帆足萬里の門弟である伊藤松太郎（祐之）と米良倉次郎（東嶠）から、賀来睦三郎（飛霞）に宛てて出された書簡。

嘉永 5 (1852) 年 6 月 14 日午の下刻（午後 1 時頃）、帆足萬里がこの世を去りました。萬里の臨終に立ち会った伊藤松太郎（祐之）、米良倉次郎（東嶠）は、各地の門弟たちに宛てて師の死を知らせる手紙を送りました。本史料もその中の一通であったと思われます。伊藤松太郎の日記によると、賀来睦三郎ら遠方にいた門弟たちも 15 日には日出に到着しており、16 日に龍泉寺にて行われた萬里の葬儀に参列したとあります。



賀来佐之書簡［嘉永5(１８５２)年頃　個人蔵］

賀来飛霞の兄である賀来佐之（佐一郎）の書簡。書簡の日付に年が書かれていませんが、本文中で萬里の死去について触れていることから萬里の没年に書かれたものと思われます。

佐之は萬里が長い闘病生活の末に亡くなったことを聞いて、深い悲しみの言葉を書簡に記しています。萬里が亡くなった当時、佐之は肥前国の島原藩（現在の長崎県島原市）に藩医として仕官していました。そのため、佐之は萬里の葬儀の参列には間に合わなかったと思われます。それゆえに師の見送りができなかったことに対する悔いの念もあったのかもしれません。また、文末では僧侶になってまでも萬里の看病にあたった野々瀬武蔵の行いにもふれ、「殊勝の至り」と称賛しています。

帆足民次郎書簡
［嘉永5～6(１８５２～５３)年　個人蔵］

嘉永 5 年 12 月 3 日に民次郎は喪主として、義父の葬儀に参列した各地の門弟たちに宛てて礼状を送りました。本書簡もその中の一通と思われ、宇佐郡佐田村（現在の宇佐市安心院町佐田地区）に住んでいた賀来飛霞（睦三郎）に宛てて出されたものです。この書簡の中で民次郎は、飛霞が佐田村から遠路はるばる参列してくれたことに対して御礼を述べています。

翌年の 6 月には民次郎は萬里一周忌の法要の案内状を飛霞ら各地の門弟たちに発送するとともに、飛霞に対しては別紙にて義母サキの葬儀参列に対してのお礼も述べています。萬里を長年に渡って支えて続けたサキ夫人は、夫の後を追うかのようにこの世を去りました。サキ夫人の墓は萬里墓から離れた龍泉寺の帆足家の墓所に設けられています。

Ⅲ 日出藩と足守藩

日出藩と足守藩

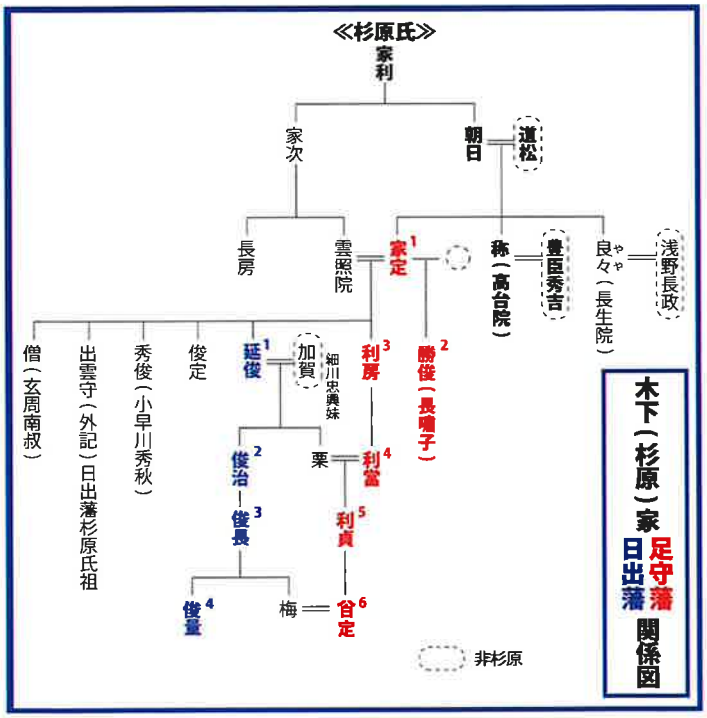
高台院の縁者として豊臣姓木下氏の名乗りを秀吉から賜り江戸期に大名となったのは日出藩木下氏だけではなく、もうひとつ備中国賀陽郡足守（岡山市北区）に２万５千石を賜わった木下家定を祖とする足守藩木下氏もありました。その家定は日出藩初代藩主延俊げんなの父であるため、この備中国足守藩の方が主家筋であったといえます。

家定が足守を拝領したのは慶長６年の３月 27 日、延俊が日出を拝領したのが４月６日。父定家拝領の石高は ２ 万５千石に対し延俊は３万石、加えて足守藩は城を構えることが許されない陣屋大名の身分となりました。三男の息子の方が厚く処遇されたといえます。それは何故なのでしょうか。

その後、日出藩は大過なく幕末に至ったのに対し、足守藩は二代勝俊が慶長 14(1609) 年改易となり、元和元 (1615) 年弟利房が再び２万５千石を拝領する間の５年近く廃絶状態でした。また、寛政 11 (1799) 年には「参勤の帰路にしてよろしからざる事ども聞へし」として、藩主の交代・所領の移封などの処分を受け危機的状況が続いたのです。

豊臣姓を名乗った日出藩と足守藩。両藩はその矜持を保ちつつ、互いの藩主の書や絵を持ち合い交流しあっていた様子が、足守藩第２代勝俊および日出藩第３第俊長の書画などから見えてくるのです。

この秋は高台院没後４００年にあたり当館でもそれにあわせた展示を計画中です。



御代々御手鑑［元禄 13(1700) 年　個人蔵］

日出藩第３代藩主木下俊長の画と足守藩第６代藩主公定（きんさだ）の跋文が入っている手鑑。手鑑とは名家の筆跡を集めて筆跡鑑定の見本としたもの。公定の跋文によれば、これには、豊臣秀吉・足守藩初代藩主家定・二代勝俊・三代利房・日出藩初代藩主延俊・小早川秀秋など一族の歌箋と、足守藩４代藩主利當（としまさ）の遺墨蔵にあった歌の表題に合わせ、日出藩３代藩主俊長が描き添えた絵が貼られているとのこと。

系図にもある通り、公定の正室が俊長の娘にあたることから、このような交流があったものと思われます。豊臣姓木下氏を名乗る両藩主家の交流はさかんに行われたのです。

龍図［年代不明　個人蔵］

日出藩３代藩主木下俊長が描いた龍の図。龍は本年令和６年の干支です。俊長は絵を能くし、彼が描いた絵が日出内外に多く遺されています。この作品も、日出藩杉原氏子孫の家に収蔵されているものです。

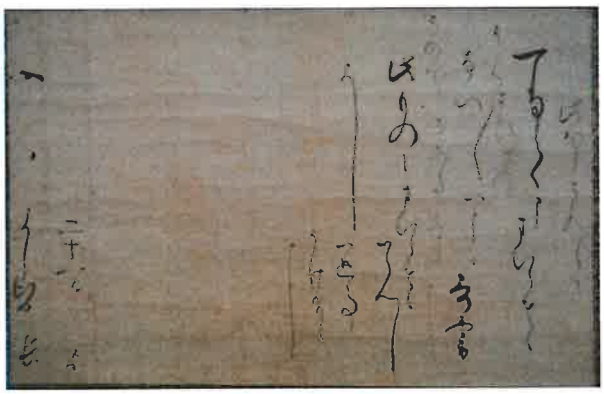
この俊長は名君との誉れ高く、彼の絵が「御代々

御手鑑」にもあるように、領外にも広く愛好されていたようです。彼が名君とされた背景には、さまざまな分野での領内整備に努めたことや、逃散などの農民の反乱に対し自ら謹慎した潔い姿勢が尊崇を集めたこと、などがあるものと思われます。それに加え絵を嗜む文人大名というイメージが重なったのではないでしょうか。

長嘯子（ちょうしょうし）書翰［年代不明　個人蔵］

足守藩第２代藩主勝俊の書状と伝わっているものです。日出杉原の子孫家に所蔵されています。「龍図」にて日出藩主木下俊長は画の才により文人大名の側面を持っていると紹介しましたが、文人大名といえばむしろ勝俊の名が挙がるものと思われます。彼は長嘯子と号し歌人として活躍し、当時交流のあった松永貞徳と歌壇を二分したともいわれています。ただし、勝俊が歌人として活躍したのは、改易となって彼が京都で暮らすようになった後であり、大名であった時代とはあまり重ならないという点にも注目しなければなりません。

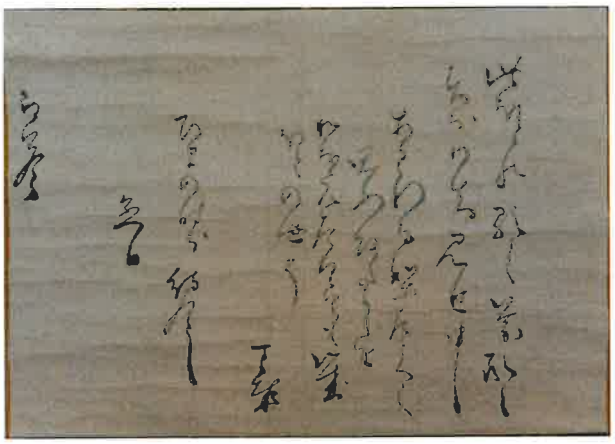
足守藩・日出藩の大名は豊臣姓を名乗る大名として、強い矜持の念を持ち文芸にも力を入れたということなのではないでしょうか。



長嘯子女［年代不明　個人蔵］

これも足守藩第２代藩主勝俊の書と伝わっているもので、所蔵も同じ日出杉原の子孫家です。しかし、明らかに先の「長嘯子書翰」と筆跡が異なります。ところが、他例を調べてみると右に掲げるような書例がありました。これは本書の筆跡に近いようにも見えますが、これもまた異なる筆跡のようにも判断されます。このように長嘯子の筆跡認識には混乱が見られ、明らかにする必要があるようです。

内容は、「此ほどの歌之義承候、すなはち見せ申候。あわれなりたとへて思ふあらましをかなえたりとも幾ほどの世ぞ、天載、ひまの時分待入申候、急日、即答」とあります。なお表題の「攵」は漢字の旁（つくり）としては「ぼく」ですが、ここでは一字として「しぶん」と読むのかもしれません。



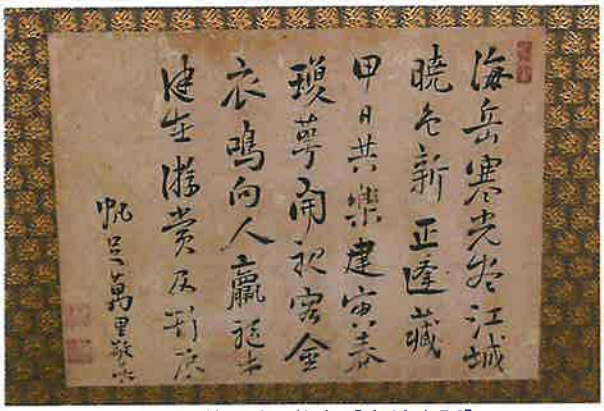
Ⅳ はんこいろいろ

はんこ（印章）をひも解く

はんこ（判子）と一言でいっても実はその種類は様々で、今でも私印（認印や実印等）、公印（社印や役職印等）をはじめとして、私たちの生活に身近な存在です。はんこは「印章」とも呼ばれ、紀元前5000 年以上前には既に存在しており、西アジアでは粘土板や封泥等に捺されたものが見つかっています。日本最古の印章は、金印（漢委奴国王印）とされていますが、実際に日本で印章が用いられるのは大化の改新以降と考えられています。

主に官司で使用されていましたが、8 世紀以降には寺社印や家印、そして個人の印も使われるようになりました。この頃の印章の殆どは公的な利用の他、封緘として使われる傾向にありました。鎌倉時代になると、宋（中国）からの文化流入によって、僧侶や文人の個人を中心に、盛んに作られるようになりました。江戸時代を迎えると、印章は庶民層へと普及し公私にわたり多様な印象が用いられるようになり、奈良時代には既にあったとされる蔵書印も、書籍の一般化によって学者や文人たちといった個人の所有印として利用されるようになります。譲渡先でも捺されるため、その書籍の来歴を知るための重要な情報となっています。

また、書画の分野では、落成款識（落款）が作品を構成する一つの要素として重要視されるようになり、作者自身が篆刻することもありました。蔵書印も落款も印文や意匠を凝らして作られたものも多く、所有者の個性とこだわりを感じることができます。



帆足萬里書（額）［当館寄託］

萬里の落款から歴史をたどる

帆足萬里が使用した落款は複数あり、いずれも共通点として、姓名印は「帆」を「颿」字で表現している点、雅号印は「卿」の「皀」部分に特徴を持たせた直線的なデザインである点が挙げられます。中には、一見すると同じ印章に見えるものもありますが、細かな特徴が異なっていること、使用している印章によって時期が異なることから制作時期を推定する際のヒントとなります。

いつ頃から使用されたか明確な落款としては、萬里が最晩期に使用した落款があげられます。『増補帆足万里全集 第４巻』で中津帆足家に遺る４種類の印章の一つとして掲載されており、「帆足萬里」印には「癸卯冬十月作」とされ、天保 14（1843）年の萬里 66 歳の作として紹介されています。弘化 4（1847）年から嘉永元（1848）年の京都遊学に係る直筆の漢詩文にこの落款が使用されていることから、同印が捺されたものは天保 14 年以降に制作されたものと分類できます。この落款の特徴として、姓名印では「萬」「里」の田の右上部分に特徴的な彫り残しと欠けがみられ、雅号印は旧来と比べてもさらに直線的に彫出されています。

帆足萬里書（額）［当館蔵］

それ以前に使用された落款印として考えられるのは、天保 8（1837）年、萬里が 60 歳を迎えた際に書いたとされる掛軸で、白文の姓名印「颿足萬里」印と「鵬卿出」印で、この印章は、「忠恕」（当館蔵）の書と同じ特徴を持つ印が捺されています。

日出藩木下家のはんこ

江戸時代の日出では、多くの書画作品が生み出されましたがそれは一般庶民の文人たちの手によるだけではありません。日出藩のトップである日出藩主も書画を多く遺しており、文教の地の礎を築いた 3 代藩主俊長は、書画の才能にも恵まれていました。精緻に描かれた「鶏図」の他、江戸の儒官であった人見竹洞の肖像画を描くなど、多様な絵画が遺されています。俊長の作品は、雅号「豊太年」の署名のみ、または署名なしの作品が多く、落款を捺しているものは少ない傾向にあるようです。『老人図』（当館寄託）は、俊長が描いたとされる作品ですが、瓢箪型の朱文印、丸型の白文印が捺されており、方形の落款印が多い日出の人の作品としては特殊な作品に見受けられます。

また、16 代俊愿の書の引首印には朱文で「観瀾堂」と捺されています。また、17 代当主の書の引首印でも「観瀾堂」とつくものがあり、恐らくは、書斎であった場所を室号としたのでしょう。実際現在遺る印には「観瀾堂」の他に 18 代当主名も彫られており、現在の「観瀾堂」の上下部分は削られ、余白はほとんどありません。このように、落款印も歴代藩主に受け継がれて使用されていたとすると、藩主が変わるごとに名前の部分だけ彫り直して使い続けている可能性があり、その場合先代までの押印と印面を照合することはできませんが、制作初代からの実物が遺り、貴重なものとなっています。

日出藩木下家旧蔵印章「豊臣」［当館蔵］

日出藩木下家旧蔵印章［当館蔵］

【主な展示資料】

Ⅰ　神儒仏の日出藩主墓考

図跡考　南仁王村	［当館蔵］
宝物軸物元帳	［当館蔵］
図跡考　南藤原村	［当館蔵］
御系図附言備考	［当館蔵］

Ⅱ　帆足萬里の最期

伊藤松太郎・米良倉次郎書簡	［個人蔵］
伊藤祐之（松太郎）日記抜書	［個人蔵］
医学啓蒙	［当館蔵］
賀来佐之書簡	［個人蔵］
西崦先生餘稿　乾	［当館蔵］
帆足民次郎書簡	［個人蔵］

Ⅲ　日出藩と足守藩

御代々御手鑑	［個人蔵］
龍図	［個人蔵］
蔵長嘯子書翰	［個人蔵］
長嘯子女	［個人蔵］

Ⅳ　はんこいろいろ

帆足萬里書額	［当館寄託］
帆足萬里書軸「忠恕」	［当館蔵］
日出藩木下家旧蔵印章『豊臣』『俊熙』	［当館蔵］
日出藩木下家旧蔵印章『観瀾堂』『堅子泉』『豊臣』『俊熙』	［当館蔵］
日出藩木下家旧蔵印章『閑房有餘情』『翠扇舎』	［当館蔵］
木下藩木下家旧蔵印章　瓢箪印	［当館蔵］

【協力機関・個人】※五十音順

大分県立歴史博物館
伊東健之　賀来睦三郎　　杉原康子

日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館

【開館時間】9：00～17：00　※入館は16：30まで
【休 館 日】月曜日（祝日の場合はその翌日）
　　年末年始（12月29日～1月3日）
【住　　所】大分県速見郡日出町2602番地1
【住　　所】TEL0977－72－6100　FAX0977－72－6103

■所管課　日出町教育委員会社会教育課（文化財係）
〒879-1506 大分県速見郡日出町3891番地2
TEL0977－73－3222　FAX0977－72－8680

日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館ホームページ（アーカイブ）にて、過去に開催した特集展を公開しています。

［令和5年］第1回特集展「写真で振り返る日出の風景と辻間楽」／第2回特集展「ひじの少年少女、まちの近代」／第3回「瀧家ものがたり」
［令和4年］第1回特集展「学芸員のまなざし」／第2回特集展「詩文に見る日出の景色」／第3回特集展「泰平の世と殿様と－木下俊懋日記から見えてくるもの－」［令和3年］第1回特集展「ひじ町を掘る－友田遺跡（藤原）と埋蔵文化財－」／第2回特集展「日出・信仰の残影－ザビエル来豊から470年を経て－／第3回特集展「帆足萬里のこころ－学びと人のつながり－」［令和2年］第1回特集展示「疫病・病魔－先人達の闘い－［令和元年度］特集展「日出藩主日記から読み解く参勤交代」
［その他］発見資料展「延由が蘇る－国松伝説を背負った男の刀－」（令和3年）／ひじはく「知られざる日出藩石工衆の技に迫る